

令和3年度 Sport in Life 推進プロジェクト
(スポーツ実施を阻害する課題解決のための実証実験)

「発達障がいのある幼児・小学生を対象とした運動・スポーツ
意欲向上のため実証実験」

事業報告書

令和4年2月18日

公益財団法人 横浜YMCA

令和3年度 Sport in Life 推進プロジェクト
(スポーツ実施を阻害する課題解決のための実証実験)
「発達障がいのある幼児・小学生を対象とした運動・スポーツ意欲
向上のための実証実験」
事業報告書

目次

1. 本事業の目的.....	3
2. 本事業の実施概要.....	4
(1) 本事業のターゲット	4
(2) ターゲットのスポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）	5
(3) 本事業で期待される効果.....	6
3. 本事業の実施内容	7
(1) 事業の実施概要.....	7
(2) 指導者養成講習会.....	9
4. 本事業の実施体制.....	16
(1) 本事業の実施体制.....	16
(2) 本事業の実施スキーム.....	16
5. 事業の実施効果（スポーツ実施頻度、実施意欲の改善効果）	17
(1) 効果検証方法	17
(2) 効果検証の結果.....	18
③ 保護者への効果について.....	23
6. スポーツ実施改善の要因の分析（阻害要因や促進要因の仮説検証）	27
7. 本事業から得られた波及効果	28
8. 今後の事業展開予定.....	29
(1) 事業継続や横展開に向けたポイント、課題.....	29
(2) 次年度以降の事業継続、横展開の計画.....	29
(3) 今後の事業展開に向けて期待される Sport in Life プロジェクトにおける取組 ...	29
9. 終わりに	30
* 参考資料 アンケート調査票・分析結果詳細	31

1. 本事業の目的

本事業は、スポーツ参画人口の拡大に向けて、Sport in Life コンソーシアム加盟団体が連携・協働して実施する取組を後押しするとともに、先進事例を形成することにより、全国各地にスポーツ参画人口の拡大に向けた取組を展開するためのモデルを創出することを目的に実施したものである。

代表団体公益財団法人横浜YMCAでは、1995年より発達障がいのある子どもたちへの支援事業を行ってきた。当時まだ「発達障害」という言葉も知られていない状況下で、彼らに対するソーシャルスキル・学習の支援を実施した。同時にキャンプなど野外での活動を通して成功体験を増やし、自己肯定感を増やしていく事業を展開していった。2007年からは発達障がいのある子どもたちを対象とした体育クラス「バランスアップ」クラスを実施。神奈川県内4か所で実施し、年間120名の参加者を集めてきた。もともとYMCAでは健康教育部が行う体育クラスの指導ノウハウがあった。発達障がいのある子どもたちも通常クラス内で活動をしていたが、一斉指導や評価システムなどの課題がありドロップアウトしてしまう子どもたちも多くいた。また、不安感からふざけてしまい、怒られることでやりたくない気持ちが先立ってしまう子どもたちもいた。それらのことから「バランスアップ」クラスでは本人の心に寄り添いながらも運動が好きになるように、寄り添っていった。子どもたちにはスモールステップでの活動が必要であることがわかってきた。

そのため、今回は、横浜YMCAのノウハウ・実績を用いて、発達障がいのある子どもたちがどのようにしたら運動やスポーツに意欲を出してくれるか、どのような環境を準備することでスポーツを継続していけるのかを検証し、障がいの有無にかかわらず、生涯にわたってスポーツを愛していく子どもたちの育成を目指すことを本事業の目的とした

2. 本事業の実施概要

(1) 本事業のターゲット

本事業のターゲットは以下のものである。

- ① 「こども」 → 年中～小学校2年生までの発達障がいのある子ども
- ② 「保護者」 → 発達障がいのある子どもをもつ保護者
- ③ 「指導者」 → 運動指導をしている指導者およびこれから指導者を目指している学生

【対象ターゲット設定の理由】

今回はメインターゲットを「発達障がいのある子ども」と位置付けた。発達障がいのある子どもたちはその特性から通常のスポーツクラブなどで受け入れてもらえないことも多く、運動機会に恵まれないことが多くある。2022年9月6日スポーツ庁ブログにはよると7～19歳までの障がい者が週1回以上の運動を行っている割合は24.9%となっている。¹これは同年代の障がいのない子どもたちが約80%とされていることを考えると非常に低い数値である。

発達障がいのある子どもたちは積み重ねに時間こそかかるが、自立して生活のできる人も多くいる。よい経験を積んでいくことでスポーツや運動を継続して行っていける可能性が高いのである。また、興味関心に狭まりのある特性のある人も多く、自分の興味のないことに関しては見向きもしない傾向にある。そんな人々にスポーツを観戦することを楽しみとし、生涯にわたっての余暇となる可能性も見いだせる。

今回はそんな発達障がいのある子どもたちをメインターゲットに、それを取り巻く保護者・指導者にもターゲットを当てる。子どもたちの意欲向上を図るだけでなく、指導者・指導者といった環境要因の整備も合わせて考えていきたい。

¹ 令和2年度「障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究」の調査結果について
[令和2年度「障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究」の調査結果について（速報値）：
スポーツ庁（mext.go.jp）](#)

(2) ターゲットのスポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）

本事業のターゲットのスポーツ実施を妨げている要因についての考察を以下に示す。

【子ども】

発達障がいのある子どもたちの特性を考える。厚生労働省ホームページによると発達障がいの特徴は以下のように説明されている。

発達障害には、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症 (ADHD)、学習症 (学習障害)、チック症、吃音などが含まれます。これらは、生まれつき脳の働き方に違いがあるという点が共通しています。同じ障害名でも特性の現れ方が違ったり、いくつかの発達障害を併せ持ったりすることもあります。

* 自閉症スペクトラム症

コミュニケーションの場面で、言葉や視線、表情、身振りなどを用いて相互的にやりとりをしたり、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを読み取ったりすることが苦手です。また、特定のことに強い関心をもっていたり、こだわりが強かったりします。また、感覚の過敏さを持ち合わせている場合もあります。

* 注意欠陥・多動性 (ADHD)

発達年齢に比べて、落ち着きがない、待てない (多動性-衝動性)、注意が持続しにくい、作業にミスが多い (不注意) といった特性があります。多動性-衝動性と不注意の両方が認められる場合も、いずれか一方が認められる場合もあります。²

発達障がいのある子どもたちにとってコミュニケーションの難しさや、落ち着きがないなど負の対応が多くあり、これらのことからなかなか一つのことに集中してスポーツや運動に熱中することが難しいのが現状である。

【保護者】

発達障がいのある子どもを持つ保護者にとって、集団においてルールを守らない・まじめにやらないわが子を見ていることは非常につらいものがある。「障がいのある子どもの運動能力に対する保護者の評価」(永浜明子ら)によると「プログラム参加の妨げに関する要因は、「ニーズとの相違」「後ろ向きな思考」「活動にともなう負担感」の3因子で構成される。このうち参加継続意図に最も影響を与えている因子は「後ろ向きな思考」である。」とされている。³このことからわかるように、保護者が不安をもって参加できないことが、障がいのある子どもたちの運動機会の減少を生んでいることも一つの要因であることがわかる。

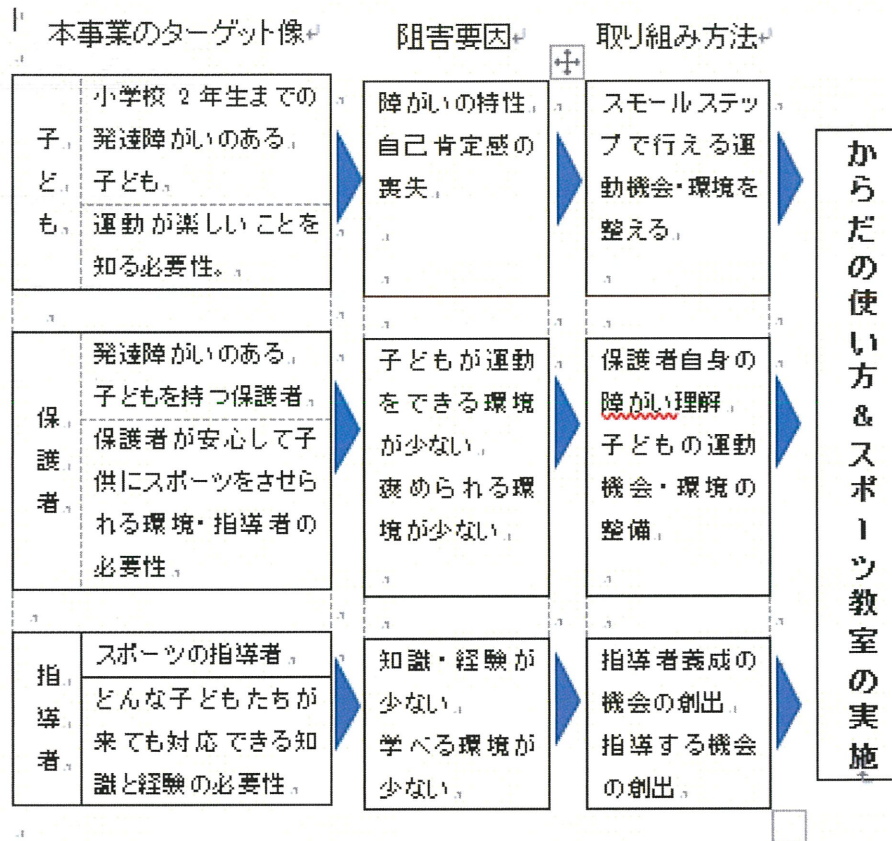
【指導者】

発達障がいは身体障がいに比べ「見えにくい」障がいである。一般クラスに参加すると「ふざけている」「まじめにやらない」など本人の特徴を理解できず、過度な注意をすることで本人のスポーツに対する意思・イメージを落としてしまうことがある。残念ながらまだ「スポーツ指導者」は「スポーツを教える人」であって「個に合った指導ができる人」が少ないのが現状である。

² 厚生労働省ホームページ 「みんなで知ろう みんなのメンタルヘルス 発達障害」
[発達障害 | こころの病気を知る | メンタルヘルス | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp)

³ [障がいのある子どもの運動能力に対する保護者の評価 — 運動の実施・継続促進に向けて— \(ssf.or.jp\)](https://ssf.or.jp)

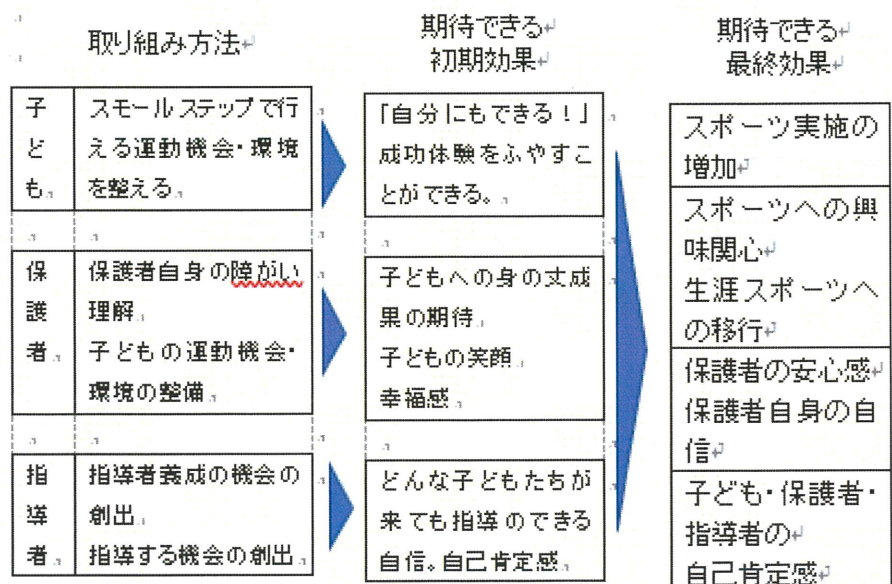
図表1 ターゲットと実施事業の関連性について



(3) 本事業で期待される効果

本事業で期待される効果を、ターゲットごとのスポーツ実施の阻害要因/促進要因、事業の実施内容との因果関係の形で、下図表に示す。

図表2 事業の実施内容、期待される効果の因果関係



3. 本事業の実施内容

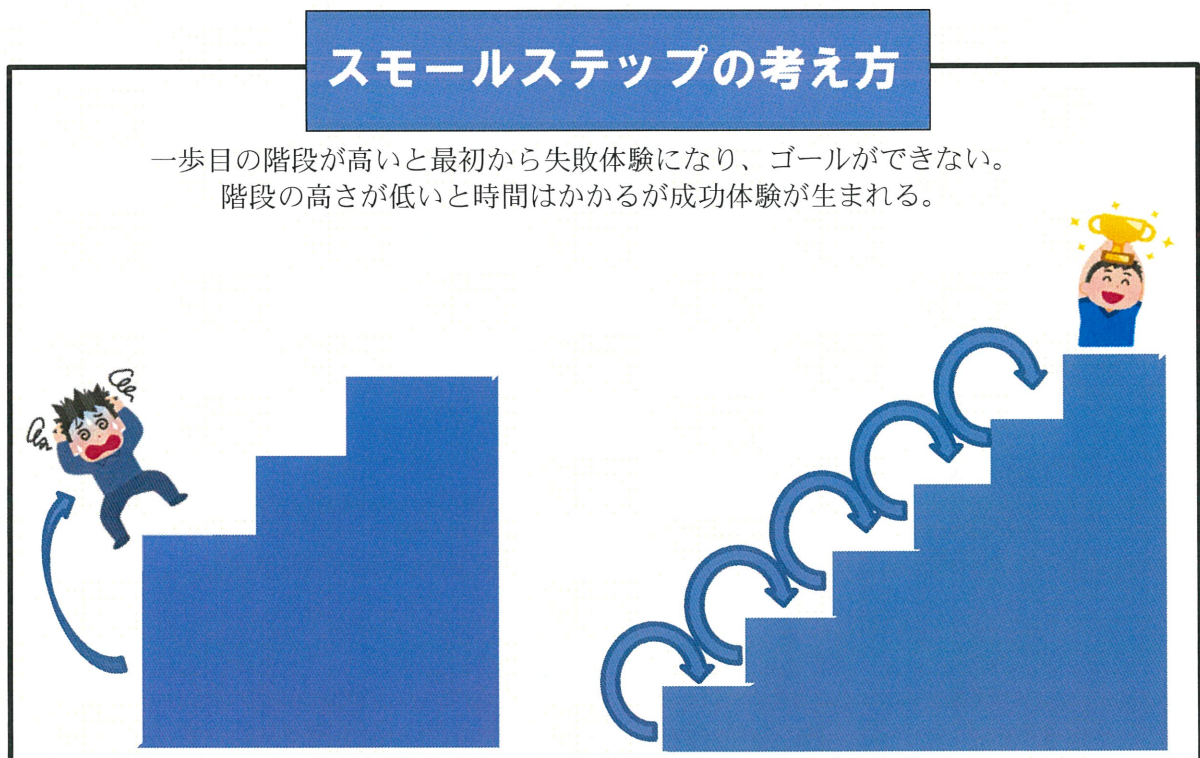
(1) 事業の実施概要

本事業のターゲットは「子ども」「保護者」「指導者」の3属性である。それぞれに対応した事業を行うとともに、それらが関係性を持ちながら発達障がいのある子ども自身が意欲向上迎えるようにするための方策を考えるものである。どの事業も関連性はあるが、事業を主軸とし、それらがどのようにターゲットに対して影響を与えると考えられるかを記述していく。

公益財団法人横浜 YMCA では、日頃発達障がいのある子どもたちをターゲットとした体育クラス「バランスアップ」を実施している。学校体育を中心に実施しているが、種目が中心になってしまっており、基礎的なからだづくりなどスモールステップでの指導がなかなかできていない。また、ボールゲームなどもドッチボールなどが中心であり、ユーススポーツ、特にプロスポーツの鑑賞などのチャンスはほとんどない。

そこで今回は神奈川県立保健福祉大学笹田哲先生と共に、作業療法士の立場からスモールステップでのからだづくりを実施し、その後それらを活用して体育・スポーツを実践することで子どもたちのスポーツへの取り組みの向上につなげていく。

図表3 次行のベースになる考え方「スモールステップ」



【事業内容】

この事業は以下の4本の柱を軸にプログラムを構成していく。

① 指導者養成講習会

指導者を育成するための養成講習会の実施。発達障がいへの理解を深めるとともに、ただ運動・スポーツを教えるだけでなく、なぜできないかを作業療法の視点から学び、運動・スポーツに結び付けていけるようにしていく。

→ターゲット：指導者

② 保護者勉強会・

保護者が子どもたちの特性をよく理解していくことが大切である。子どものことをよく知ることで、子どもたちの身の丈を理解し、家庭でも多くの成功体験が得られるように支援していく。

→ターゲット：保護者

③ 親子スポーツ観戦

スポーツは「実施する」だけでなく「観戦する」楽しみもあることを伝える。特に周りに気兼ねすることなく参加できる環境を整え、生涯にわたるスポーツの必要性を知ってもらうチャンスとする。

→ターゲット：子ども・保護者

④ 「からだの使い方&スポーツ・体育教室」の実施

スモールステップでの指導を発達障がい・各スポーツの専門指導者がタッグを組んで行うことで、子どもたちの成功体験を増やしていくことを目的とする。また、保護者が自分の子どもたちの指導を見ることで、自信をつけ適切な対応ができるように促していく。指導者は講習会で学んだことを基に適切な指導ができるよう実践する。

→ターゲット：子ども・保護者・指導者

最終目的としては、指導者・保護者・経験などの環境を整備し、発達障がいのある子ども自身がスモールステップでの指導を経験することで、運動意欲の向上ができることの実証実験としていく。

(2) 指導者養成講習会

<募集方法>

指導者講習会の募集は以下への依頼を中心に実施した。

- ・学校法人横浜 YMCA へ依頼
横浜 YMCA スポーツ専門学校・YMCA 社会福祉専門学校の2校を中心に障がい児者へのスポーツ指導に興味のある学生へ募集を実施。
- ・公益財団法人横浜 YMCA スタッフ・リーダーへの依頼
健康教育部ですでに一般クラスを担当している指導者を中心に募集。
- ・神奈川県立福祉保健大学笹田研究室からの募集実施
作業療法士を目指している学生を中心に募集。

全2回の講習会に延べ58名（参加者は49名）の応募があった。

<実証>

- ・ZOOMを利用した配信型の講演会とした。オンデマンド講演も考えたが、使用する資料が著作権の発生するものであったため、録画ができずオンタイムのみでの配信となった。
- ・「からだの使い方&スポーツ教室」にはこの講習会に参加することを義務とした。
- ・参加後にアンケートを実施した。
- ・アンケートはオンラインで回答を得た。
- ・質疑応答はチャットおよび講演会後の直接質疑の形態をとった。

あつまる。つながる。よくなっていく。

発達障がいのある子どもたちへのスポーツ・体育指導者講習会

「できるを増やす！運動・スポーツの指導法」

詳細・体育での失敗が承るにつれて、子どもはやりたくないものになってしまいます。この研修では、がけっこやボール遊び、なわとび、とびこなどについて、脳ミッド線系による動きの理解から、運動課題に対する目的つけた指導・サポート法を体験も交えながらご紹介します

◎日 時 2021年11月12日(金) 19:00~20:30 Zoom配信

◎対象 体育・スポーツの指導者どなたでも

◎参加費 無料

◎申し込み 11月10日までに以下よりお申し込みください。お申し込みいただいた方にZoomアカウントを前日までお送りします。

◎講師紹介 笹田賢氏
神奈川県立福祉保健大学教授
横浜特別支援教育センター「ストレッツマンゴールド」室長兼室長

「発達障がいの子どものための体育指導のコツ教えます！」

順番が待てないどこかに行ってしまうほかの子より進歩が遅い発達障がいのある子どもたちの中には運動自体の課題よりもほかの課題のほうが大きい子どもたちがいます。そんな子どもたちとどう付き合っていくらいいのかな？そんなことをお教えします。

◎日 時 2021年11月17日(水) 19:00~20:30 Zoom配信

◎対象 体育・スポーツの指導者どなたでも ◎参加費 無料

◎指導者 田沼美穂(横浜YMCAオルタナティブ事業部専門員)

◎申し込み 11月18日までに右記よりお申し込みください。お申し込みいただいた方にZoomアカウントを前日までお送りします。

この事業は、スポーツ庁2021年度Sport in Life推進プロジェクト(スポーツ実施を推進する課題解決のための実証実験)として行います

湘南とつながるYMCA
公益財団法人横浜YMCA 〒224-0202 横浜市神奈川区磯子1-10-1 TEL:045-854-4102

＜第1回講習会＞ 「できるを増やす！運動・スポーツの指導法」

日時：2021年11月12日（金）19:00～20:30

（オンラインで配信）

講師：笹田哲（神奈川県立保健福祉大学教授）

参加者数：21名（学生12名、社会人9名）

内容：体育が苦手な子どもたちの「できる体」をつくるには、運動課題の単純な繰り返しだけでは効果が望めない。分析ツールとして「動きのピラミッド構造」をヒントとして、第1段階のから第4段階の順に判定していく。スモールでの指導を大切にしていくことが大切である。



＜第2回講習会＞ 「発達障がいの子どもへの指導法のコツ教えます」

日時：2021年11月17日（水） 19:00～20:30

（オンラインで配信）

講師：田沼美穂（横浜 YMCA オルタナティブ事業部専門指導員）

参加者数：28名（学生13名、社会人15名）

内容：発達に課題のある子どもたちには「こだわり」や「過敏」など発達の特徴がある。多くの場合、それに気づかず「不真面目」「怠けている」などと思われ、怒られるケースが多い。彼らの特徴を理解し、その特徴を生かした指導をしていく必要がある。今回は「障害理解ワーク」を行い、実際に子どもたちがどのような経験をしているのかを体験した。また、ケースワーク・合理的配慮などを通して、インクルーシブ教育における配慮の方法を学んだ。

「合理的配慮」とは...

障がいのある方が日常生活や社会生活で受けるさまざまな制限をもたらす原因となる社会的障壁を取り除くため、障がいのある方に対し、個別の状況に応じて行われる配慮

平等 公平 現実 解放・環境



① 保護者勉強会

<募集方法>

保護者勉強会の募集は以下への依頼を中心に実施した。

- ・「からだの使い方&スポーツ・体育教室」参加者へのアプローチ
- ・公益財団法人横浜 YMCA 発達障がいのある子どもたちの体育クラス「バランスアップ」参加者保護者へのアプローチ
- ・地域の保育園・幼稚園へのちらし配架
特に全国の YMCA 保育園へメール・SNS でのアプローチを行った。

<実証>

- ・ZOOM を利用した配信型の講演会とした。オンデマンド講演も考えたが、使用する資料が著作権の発生するものであったため、録画ができずオンタイムのみでの配信となった。
- ・保護者が子どもの発達に合わせた体づくりをしていくことで、本人の自己肯定感が下がることなく楽しく、そして生活に役立つ体づくりを考えていけるようなアドバイスをしていく。
- ・参加後にアンケートを実施した。アンケートはオンラインで回答を得た。
- ・質疑応答はチャットおよび講演会後の直接質疑の形態をとった。

<勉強会詳細>

「小学校に入るまでにやっておきたいからだづくり」

日時：2022年1月29日（日） 10：00～12：00

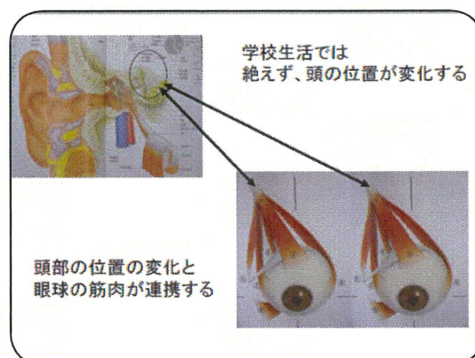
（オンラインで配信）

講師：笹田哲（神奈川県立保健福祉大学教授）

参加者数：44名（保護者32名、指導者4名、保育士）

内容：発達に課題のある子どもたちが小学校に入る前、また小学校に入った後にどのような支援をしていくことが大切か、また普段の生活の中でどのような活動を行うことが有効なのかをお話いただく。

*当日の資料



「小さなできた」を！

- ・できない動作を反復させる指導（例：できるまで縄跳びを繰り返す）では身につかないことが多い。
- ・気になる動作をピラミッド構造で分析し、チャレンジ・プログラムを立案する
- ・遊びの中に織り交ぜると「ちょっとやってみようかな」と、チャレンジが芽生え、そして「小さなできた」が生まれてくる。

募集チラシ

あつがる。 つながる。 よくなっていく。

YMCA

年中・年長のお子さんをもつ保護者のための
小学校に入るまでにやっておきたいからだづくり

NHK「ストレッチマンゴールド」監修
神奈川県立保健福祉大学教授 榎田哲先生
NHK特別支援教育番組
「ストレッチマンゴールド」番組企画委員、
横浜教育支援委員会委員長
「発達につながる「できる」を増やすからだづくり」監修

小中学校での失敗が手帳につれて、子どもは様々なことにチャレンジしにくくなってしまふことが多くあります。生活中心である幼稚園・保育園とは違い、小学校では様々な活動や働きが求められます。「なぜできない?」「なぜ」に立ちあがって子どもの姿をとらえていくことで、自信が見えてきます。子どもたちの「なぜ」の解決のひとつの糸口になればと思います。

◎日 時 2022年1月29日(土) 10:00-12:00 Zoom配信
◎対 象 年少~年長までのお子様をもつ保護者の方、指導者、関係者などなたでも。
◎参加費 無料
◎申し込み 以下のQRコードよりお申込みください。
お申込みいただきました皆様には実施日1週間前までにZoomアカウントをお送りいたします。

この事業は、スポーツ庁2021年度 Sport in Life 推進プロジェクト（スポーツ実施を推進する課題解決のための実証実験）として行います

湘南とつなぐ YMCA
公益財団法人横浜 YMCA 〒244-0285 850-8500 TEL 045-854-4732

② 親子スポーツ観戦

<募集方法>

「親子スポーツ観戦」の募集は以下への依頼を中心に実施した。

- ・「からだの使い方&スポーツ・体育教室」参加者へのアプローチ
- ・公益財団法人横浜 YMCA 発達障がいのある子どもたちの体育クラス「バランスアップ」参加者保護者へのアプローチ
- ・地域の保育園・幼稚園へのちらし配架

<実証>

- ・実施時間1時間前に集合し、横浜ビー・コルセアーズアカデミーの協力を得て「簡単ルール説明と見どころ大発見!」を実施。簡単なルールを理解してもらうことと共に「楽しみ」になるよう見通しを立てる。
- ・保護者がともに楽しめるよう、子どもサポート隊をつくる。
- ・参加後にアンケートを実施し、参加前と参加後の子どもの様子を観察する。

<実施について>

- ・2022年1月5,6日横浜ビー・コルセアーズ VS アルバルク東京戦を予定していたが、両クラブ選手に新型コロナウイルス陽性者が確認され、試合が中止された。期間内に実施が難しかったため、実施自体を中止とした。1月5日(土)28名、1月6日(日)32名の参加予定であった。

③ 「からだの使い方&スポーツ・体育教室」の実施

<募集方法>

- ・横浜 YMCA 発達支援クラス参加者、横浜 YMCA 健康教育部（水泳・体操等）参加者へのメール配信
- ・横浜 YMCA 保育園、地域保育園・幼稚園へのチラシの配架。
- ・ホームページでの募集 <https://www.yokohamaymca.org/event/20211125/>
- ・横浜リハビリテーションセンター、自立支援協議会児童部会、地域児童発達支援事業所・放課後等デイサービスへのチラシの配架

<実証>

- ・直接来館していただき対面型指導を実施。会場を横浜北 YMCA（横浜市港北区菊名）と湘南とつか YMCA（横浜市戸塚区上倉田町）の2拠点をベースに実施した。
- ・プログラムは親子参加の形式で実施した。
- ・参加前後に「キッズ乳幼児発達スケール（用紙Cタイプ）」を保護者に記入してもらい、運動・操作・理解言語・表出言語・概念・対子ども社会性・体成人社会性・しつけ・食事について調査を行う。プログラム前後の際について調査する。
- ・プログラム中の子どもたちの様子を動画で撮影、細かな所作・態度などからプログラム中の意欲向上の様子を分析する。
- ・終了後保護者にアンケートを記入していただき、保護者の目から見た様子を記述してもらう。

<実施内容>

	日程	時間	場所	内容
A コース	11月21日（日）	15:00-17:00	湘南とつか	かけっこ・とびばこ
	12月4日（土）	10:00-12:00	湘南とつか	バスケットボール
	12月25日（土）	10:00-12:00	湘南とつか	かけっこ・なわとび
	1月8日（土）	Bリーグ観戦	横浜国際 プール	アルバルク東京戦
B コース	11月28日（日）	15:00-17:00	横浜北	かけっこ・とびばこ
	12月18日（土）	10:00-12:00	湘南とつか	バスケットボール
	1月9日（日）	Bリーグ観戦	横浜国際 プール	アルバルク東京戦
	1月23日（日）	15:00-17:00	横浜北 YMCA	かけっこ・なわとび

- ・参加者数 Aコース8組、Bコース8組の参加。学校行事・体調などで日程変更も可とした。全工程（3回）参加者は7名であった。延べ人数では45名となった。
- ・参加は原則親子とした。保護者の都合で祖父母の参加の場合はリーダーがサポートした。

・当日タイムテーブル

時間		内容
9:30	14:30	スタッフ集合・打合せ
10:00	15:00	メンバー集合 あいさつ・今日の流れの確認
10:10	15:10	「からだの使い方教室」 笹田哲先生
10:55	15:55	休憩
11:05	16:05	「スポーツ・体育教室」 健康教育部スタッフ 11月21日(日) 横浜北 かけっこ・とびばこ 11月28日(日) とつか かけっこ・とびばこ 12月4日(土) とつか バasketボール 12月18日(土) とつか バasketボール 12月25日(土) とつか かけっこ・なわとび 1月23日(日) 横浜北 かけっこ・なわとび
12:50	17:50	ふりかえり・あいさつ 保護者アンケート記入

*通常スポーツ教室の場合、軽い準備体操のあとすぐに種目トレーニングを行うことが多い。今回は種目に入る前に種目のために使う動きを行う「からだの使い方教室」を45分間実施した。

種目によって内容は変わるが、おおむね以下のような種目を実施した。

◎「ストレッチマン体操」

笹田先生が監修しているNHK教育番組「ストレッチマンゴールド」を見ながら実施。準備体操として毎回実施。

◎スクーターボード

タイヤのついた遊具です。バランス感覚を養い、上肢の力・平衡感覚を養います。腹ばいに乗ると普段意識のいかない背中へも意識が向くようになる。

◎タオル体操

浴用タオルを使って縄跳びのように足をくぐらせる、片方にこぶをつくってなわとびのように回す、投げるなど基本運動の導入をおこなう。

◎フラフープ体操

固定した状態でボールのバウンドのような動き、なわとびのようにまわし手首の使い方を練習する。

4. 本事業の実施体制

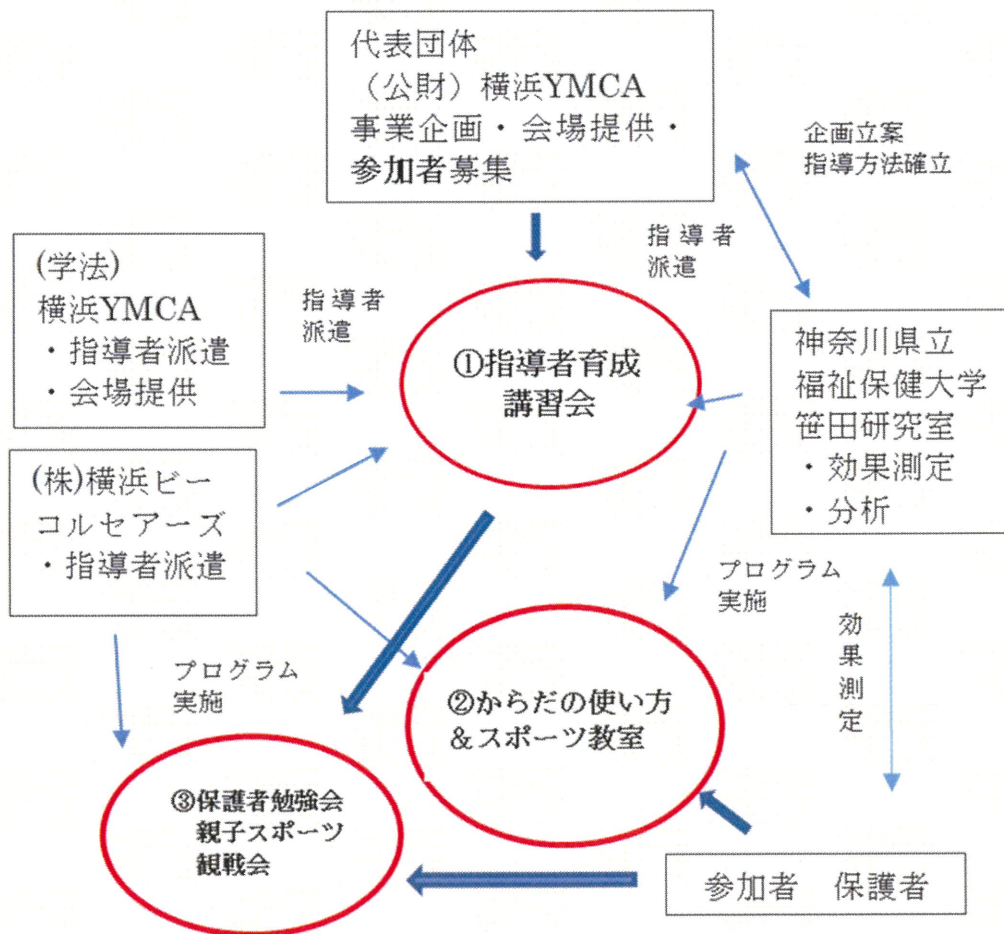
(1) 本事業の実施体制

実証フィールド	横浜市（港北区・戸塚区）
代表団体	公益財団法人 横浜YMCA *
構成団体	学校法人 横浜YMCA * 神奈川県立保健福祉大学笹田研究室 * 株式会社 横浜ビー・コルセアーズ
構成団体以外の参画団体	なし

※ 「*」は Sport in Life コンソーシアム加盟団体

(2) 本事業の実施スキーム

本事業における代表団体、構成団体、その他参画団体の役割は以下のとおりである。



5. 事業の実施効果（スポーツ実施頻度、実施意欲の改善効果）

（1）効果検証方法

今回の実証実験は「子ども」「保護者」「指導者」の3本を基本とする。それぞれの対象によって検証方法をわけ、実施した。

ターゲット	発達障がいのある子ども
調査方法	① 走行タイムの前後比較 ② 児童版・意志質問紙（PVQ）による得点の推移 ③ 短縮版・小児作業プロフィール（SCOPE）による得点の変化 ④ 発達スケール（KIDS）によるプログラム実施前後の比較
期待される効果	意欲の向上 →スモールステップで実施することでの意欲向上 →からだの使い方を理解しての走行タイムの向上
主体	神奈川県立保健福祉大学笹田研究室

ターゲット	発達障がいのある子どもを持つ保護者
調査方法	① 勉強会実施後のアンケート ② 「からだの使い方&スポーツ・体育教室」参加時のアンケート・聞き取り ③ スポーツ観戦会参加時のアンケート・聞き取り
期待される効果	保護者の子どもの運動に対する意欲理解の深化 →保護者の理解の深まりに伴い、子どもの活動継続性が向上する。
主体	公益財団法人 横浜YMCA

ターゲット	発達障がいのある子どもの指導をする・したい指導者
調査方法	① 子どもの特性を理解し、指導に反映させる ② 指導後反省会を実施しする。
期待される効果	勉強会で学んだ特性を理解しながら、現場を体験し指導力の向上 →理解のある指導者の育成
主体	公益財団法人 横浜YMCA

(2) 効果検証の結果

①子どもへの効果について

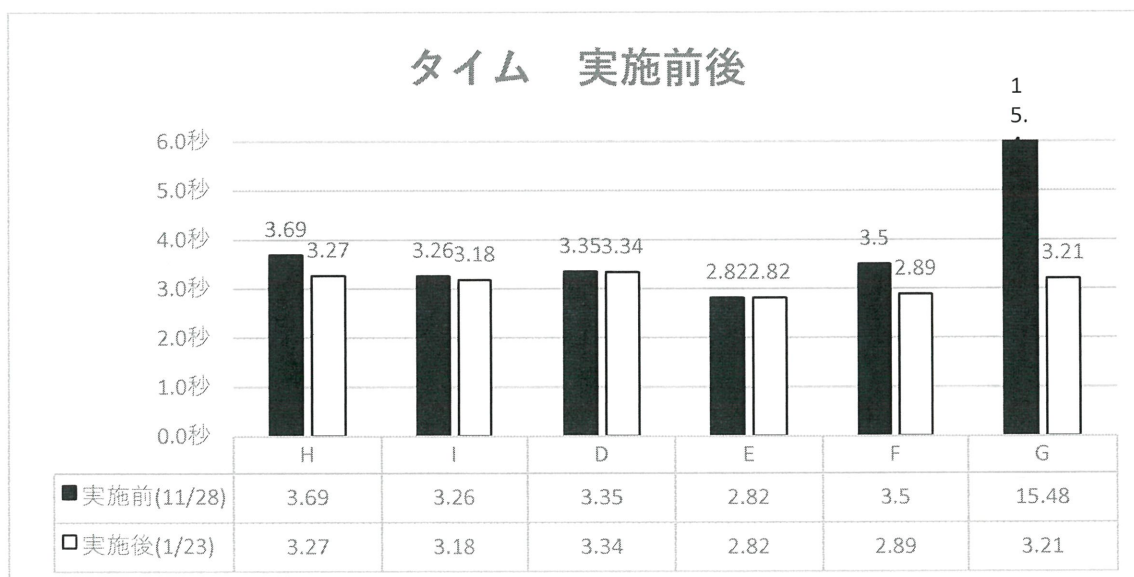
1) 走行タイムの前後比較

参加児童6名について、本プログラム実施前(21年11月時点)と本プログラム実施終了後(22年1月時点)において、タイムを計測した。5名は走行スピードタイムは向上した。1名(児童E)は変わらなかったが、この児童は、実施前から速いタイムであった。走っている様子が、初回時は、緊張し、不安な様子を示していた児童が多かったが、最終時には、走り終わった後、笑顔が見られ、

またチャレンジしたいという発言する児童も見られ、和やかな雰囲気が観察された。特に子どもGは初回非常に緊張をしており、ふざけることで気持ちを紛らわせていた。3回の中に指導者・場所に慣れ、周りと一緒にできる自信がついた様子であった。そのため1回目はふざけながら走ったため15秒以上かかっていたが、3回目にはほかの子どもたちと同じように走ることができた。単に、運動技巧が向上しただけでなく、心理面、特に意欲、やってみたい、チャレンジしてみたいという自己効力感も向上していたと考えられる。

(※3回すべてに参加した児童7名<欠席しなかった児童>を対象に作成しています)

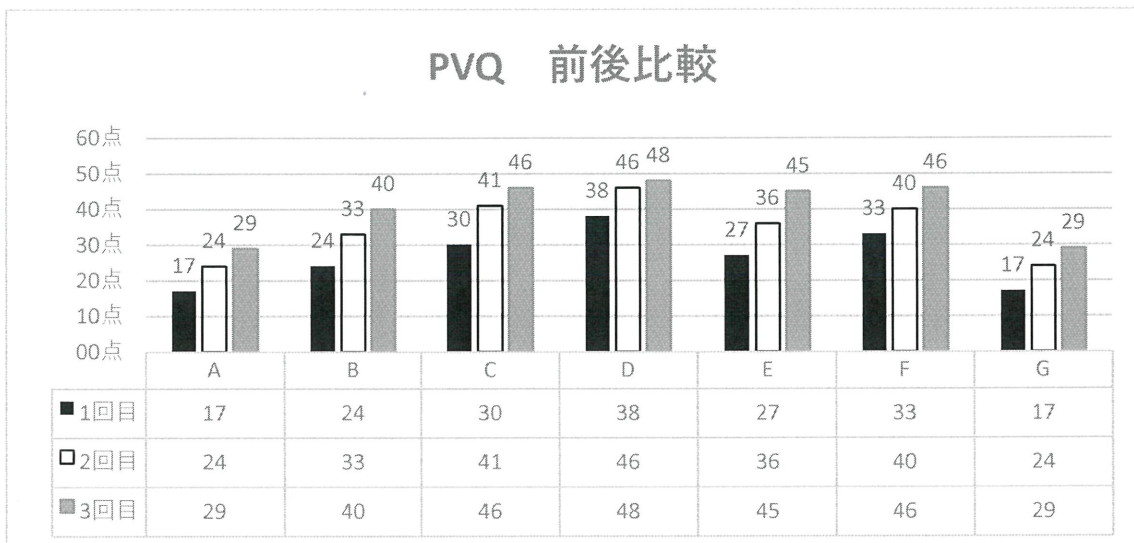
図表4 本プログラム実施前後における走行タイムの比較



2) 児童版・意志質問紙 (PVQ) の得点の変化について

児童版・意志質問紙 (PVQ) は児童の運動活動における意欲、関心、興味などの程度を数量化した検査である。今回、毎回のクラスの様子を動画で撮影し、それを笹田研究室で質問用紙上に落とし、児童版・意志質問紙 (PVQ) の得点として換算をした。本プログラムは3回コースで企画したが、3回とも参加できた児童7名について、得点の変化を継続的に調べてみた。グラフに示したように、どの児童も、徐々に得点が増加し、上昇傾向を示していた。これは、参加回数を重ねるごとに、参加意欲、運動課題に対する参加意欲が向上していたと推察される。

図表5 意志質問紙 (PVQ) の得点の推移

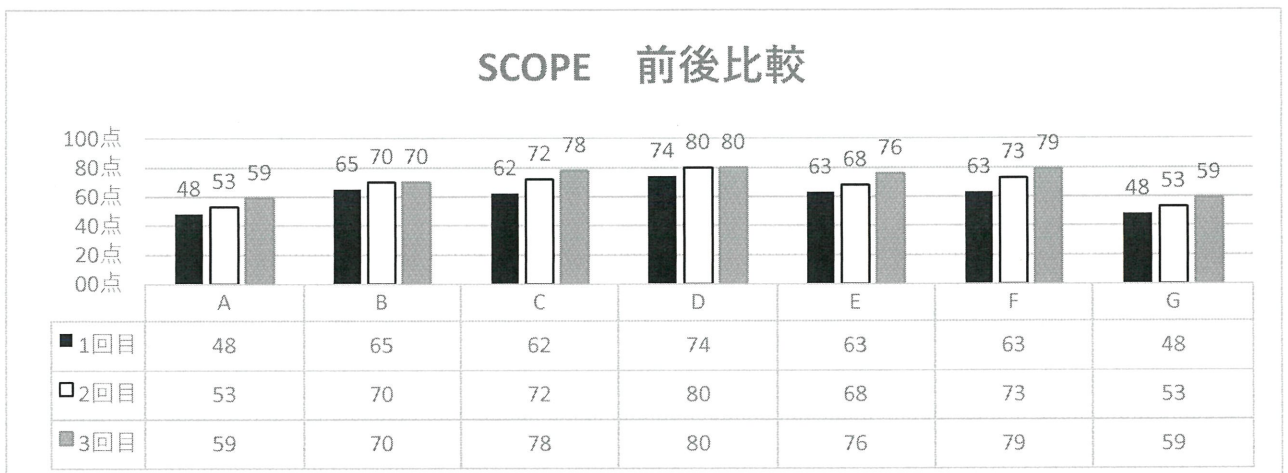


3) 短縮版・小児作業プロフィール (SCOPE) の得点の変化について

短縮版・小児作業プロフィール (SCOPE) とは、児童の運動能力、生活習慣、役割意欲などをトータルに評価する検査である。得点の伸びも、少しではなく、10 点近く増えている児童が多く見られた。得点増加の要因としては、運動技能の向上のみならず、意欲の得点も向上していたので、それらが関連して、得点の大きな増加につながったものと考えられる。

(※3 回すべてに参加した児童 7 名<欠席しなかった児童>を対象に作成しています)

図表 6 短縮版・小児作業プロフィール (SCOPE) の得点の推移

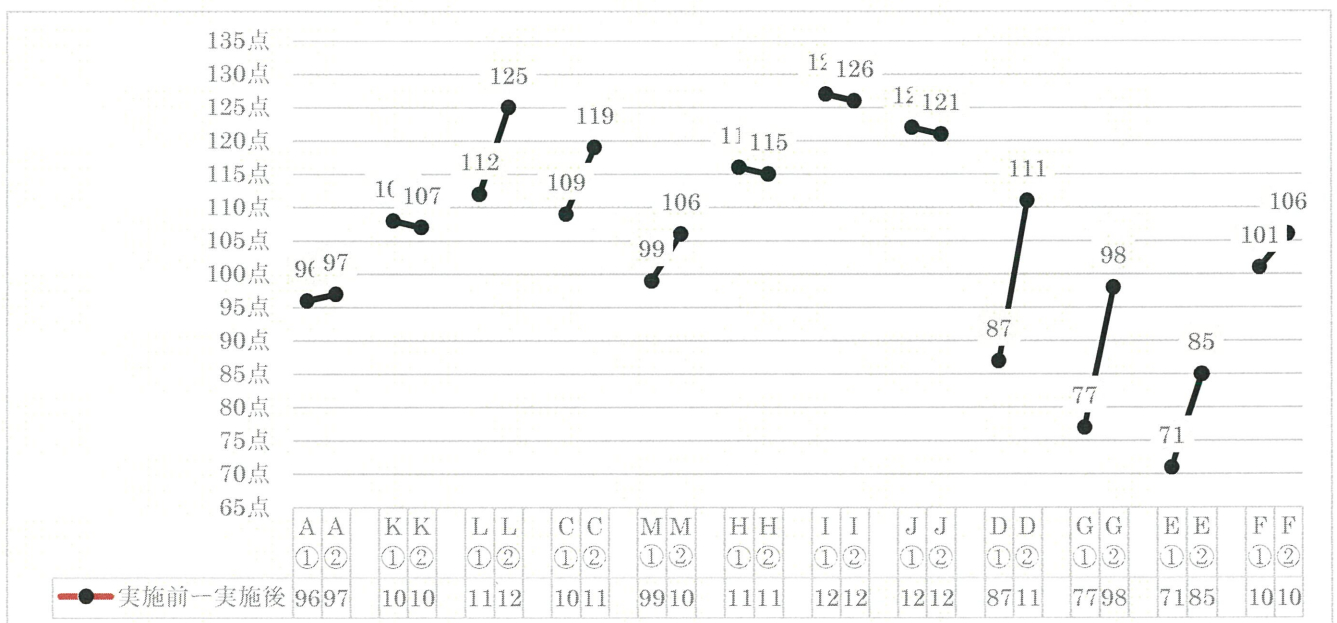


4) 乳幼児発達スケールにおけるプログラム実施前後の比較について

幼児発達スケール（KIDS）を用いて、本プログラムの実施前後について、得点を比較してみたところ、得点が上昇していた児童は、12名中8名であった。4名は得点が下がっていたが、得点差が±1であり、下がったというよりは、ほぼ変わらないと捉えたほうが妥当であると考えられる。伸びた児童の得点の上昇傾向は、6名が大きな伸びを示していた。

（*実施前と実施後に回答してくれた人数、12名をもとに作成しています）

図表7 乳幼児発達スケール（KIDS）におけるプログラム実施前後の比較



* 「キッズ乳幼児発達スケール」とは

全国 38 都道府県の乳幼児 6,000 名によって標準化された新しい検査。自然な行動全般から発達を捉えることができ、場所・時間の制限を受けずにどこでも短時間で診断できる。領域別評価の示されない他の知能検査等の補助検査としても活用することができる。

<検査領域>

- ・運動 体全体の大きな動き
- ・操作 手指などの意図的な動き
- ・理解言語 言葉の理解
- ・表出言語/話すことのできる言語
- ・概念/状況依存によらない言語的理解
- ・対子ども社会性/友達との強調行動



- ・対成人社会性／大人との関係、特に親子関係
- ・しつけ／社会生活における基本的なルール
- ・食事／衛生感覚や食事の基本的なルール

< 結果処理 >

領域ごとに○の数を集計し、手引の換算表から発達年齢を求める。

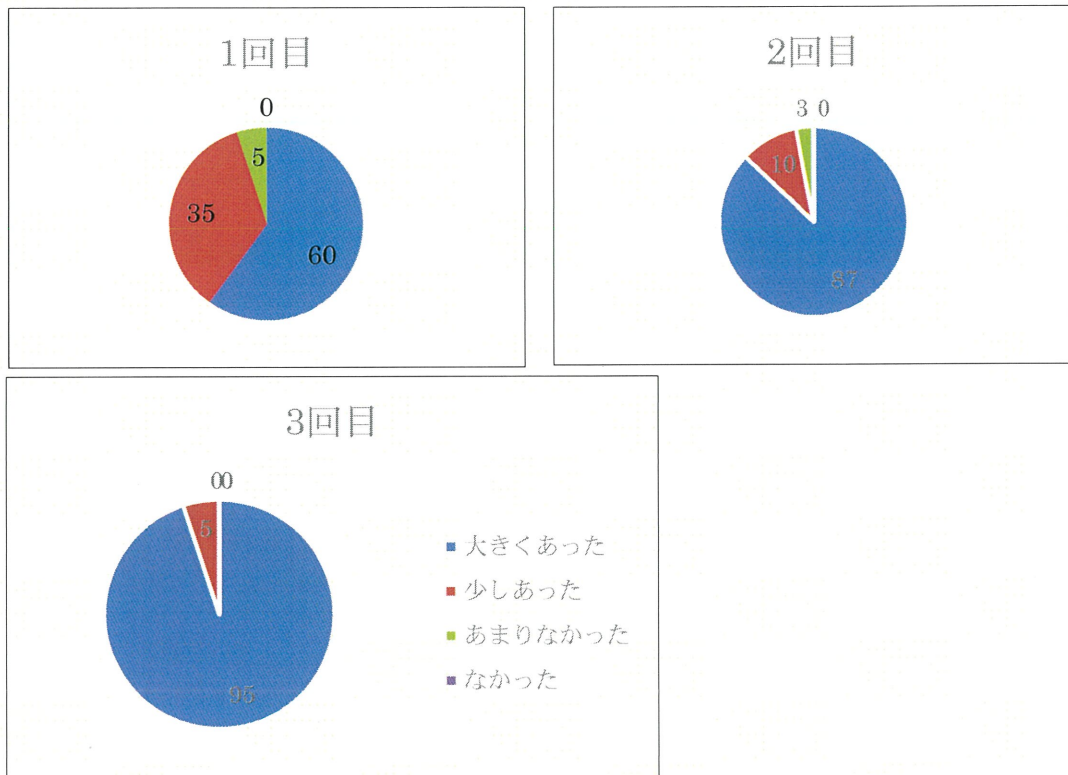
- 結果
- ・領域別発達プロフィール
 - ・領域別発達年齢・総合発達年齢
 - ・領域別発達指数・総合発達指数

③ 保護者への効果について

毎回アンケートを実施。共通質問として以下の質問を行った。

1) クラスの前後、前回クラスと比較してお子さんの変化はありましたか？

図表8 お子さんの様子に変化はありましたか？



「クラスの最初と最後でどのような変化がありましたか？」

- ・ 普段は運動が苦手であきらめてしまうことが多いので楽しみながらすべてやり遂げられたという経験が自信につながったと思います。変化はまだわかりませんが前向きに取り組んでいると思います。
- ・ 走り方がよくなった。実際にやり方を一つひとつ動きの確認をすると理解できるようだった。
- ・ 最初は緊張で後ろのほうで見るような感じであったがだんだん積極的に参加できるようになってきた。
- ・ 最初は気乗りしなかったのですが、だんだん楽しそうにやっていました。
- ・ 走りに変化があった。腕と足の使い方が上手になっていた。楽しかったという反応から取り組めるというのは発達障がいのある子どもにとって一番助かります。
- ・ すぐには変化が見られなかったが継続していきたい。

b) 2回目のアンケート

「前回と比べて変化はありましたか？」

- ・目的は同じでも少し同じで少し違う内容だっただけに目を輝かせながら参加できました。特にバスケは「シュートを決めたい」と自分で目標を決めてどのようにしたらよいかを試行錯誤し、最後に達成できた姿に成長を感じました。
- ・慣れるまでの時間が短くなってきました。
- ・1回目に比べ緊張がほぐれ明るく参加できたようです。
- ・流れを理解できてきた。少し慣れが出てきたようで話を聞けなくなってきた。
- ・ストレッチマン体操は2回目だったので安心して参加できた。
- ・2回目だったので同じことはすんなりとできました

c) 3回目のアンケート

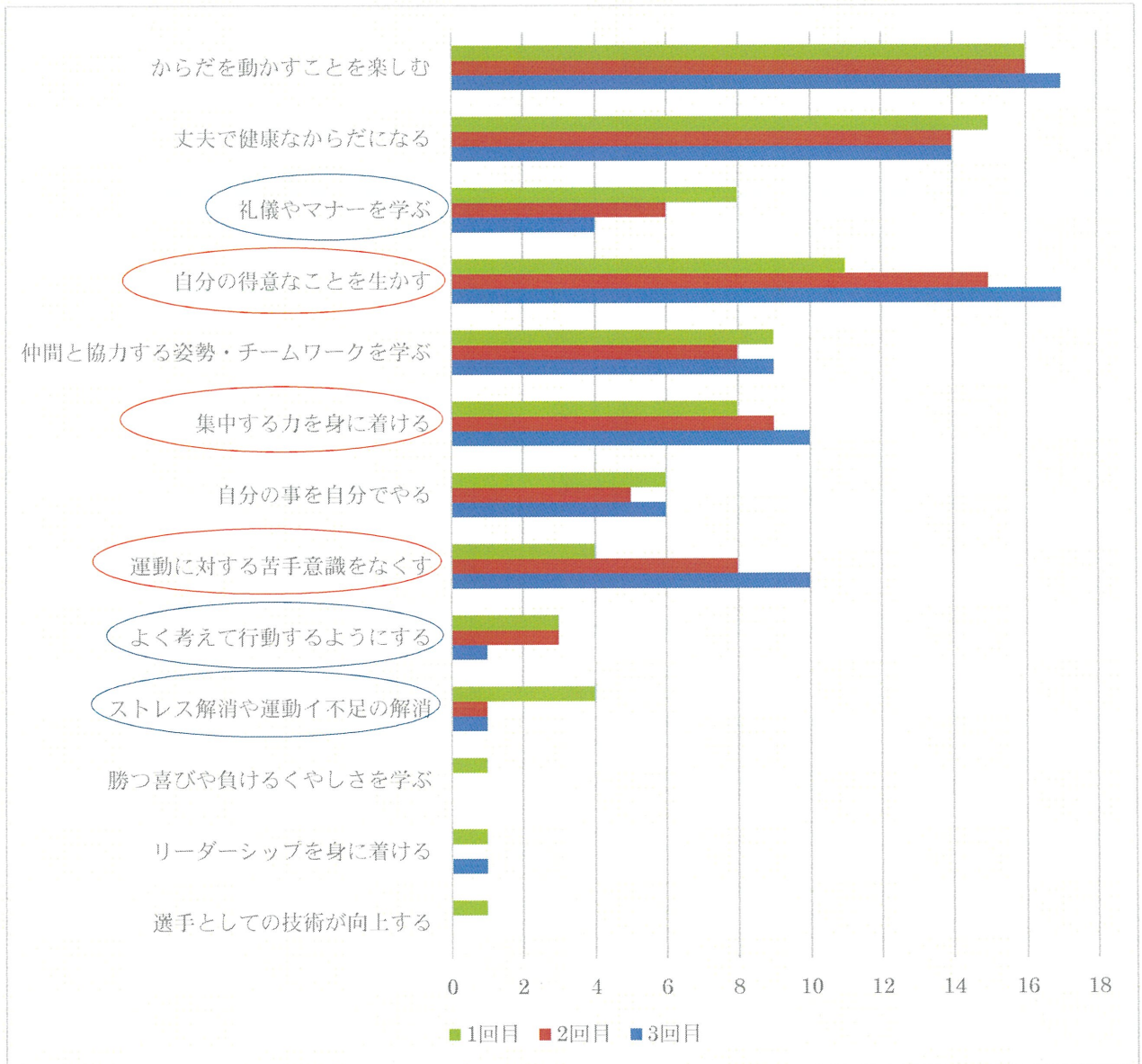
「1回目と比べて変化はありましたか？」

- ・遅れてきたので最初はやらなかったが、スクーターボードをみんなが楽しそうにやっているのを見て入ることができた。
- ・回を重ねるたびに体を動かす力（イメージする力）が上達していると思う
- ・見通しが立っていたので、最初参加できなかったが継続したおかげでできた様子。
- ・前回同様姿勢がよくなった。走る時も頭のとっぺんが天井に向かうようになっていました。顔を上げるというのが背中にも良いというのを聞いて納得できました。ドテドテ走っていたのが軽やかになってきました。
- ・からだの使い方がうまくなった。継続しないと忘れてしまうので家で練習させようと思う。

*今回、親子スポーツ観戦実施前後にもアンケートを実施する予定でしたが、試合が中止となってしまったため、実施できなかった。

2) こどもにスポーツを行わせるときにどの部分をもとめますか？→複数回答あり。

図表9 子どものスポーツにもとめること。



1回目よりポイントが高くなった項目

1回目よりポイントが低くなった項目

④ 指導者への効果について

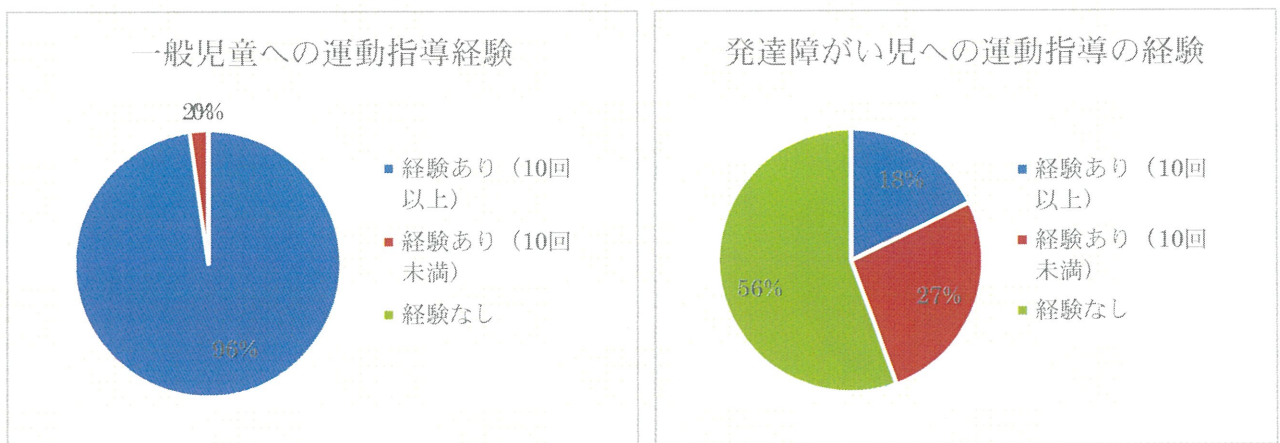
<評価>

参加者 49 名中 45 名がアンケートに返答

●指導経験

YMCA内部のリーダー・スタッフが多かったため一般児童への指導経験はほとんどあったが、発達障がい児への指導経験のあるものは全体の 44%であった。指導経験のある者の中にも「一般クラス内での指導」が最も多く、発達障がいのある子どもを専門的に指導した経験のあるものは 25%であった。

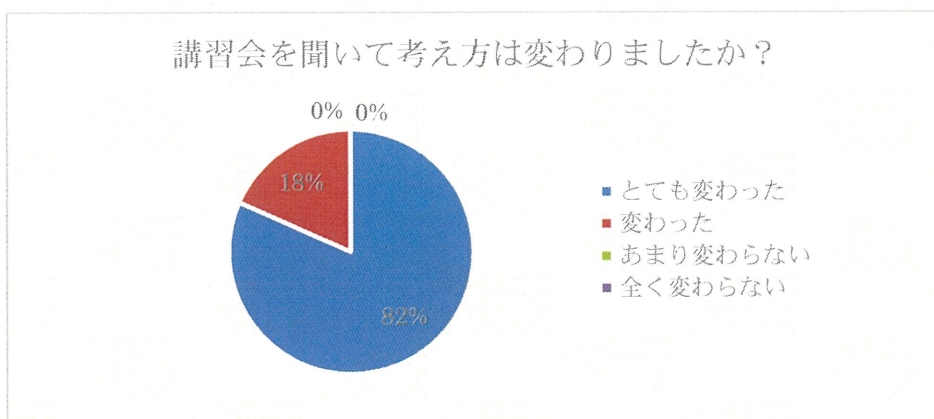
図表 10 参加者の指導経験



●講習を受けて考え方の変わったところがありますか？

ほとんどの方が「変わった」と回答。受講後の感想参照。

図表 11 講習会を聞いて変わりましたか？



●受講後の感想（一部抜粋）

- ・なんでうまくいかないのか疑問な点が多かった。「がんばれ」「やればできる」では子どもたちはやる気にならないことに気が付かされた。
- ・スモールステップでの活動が大切なことはなんとなくわかっていたが、再度確認することができた。

- ・「なんでできないのか？」を考えながら教えていきたい。
- ・一般の子どもたちと一緒に教えることは難しい。どうやったらいいのか実技なども交えて学んでいきたい。
- ・今までは「勝つスポーツ」をやってきたが、とびばこがとべることが自己肯定感につながるとは考えてみたこともなかった。

6. スポーツ実施改善の要因の分析（阻害要因や促進要因の仮説検証）

5における調査結果を踏まえて、ターゲットごとにスポーツ実施率を改善する要因を分析すると以下のとおりであると考えられる。子どもについてはスポーツの基礎的動きを習得することで意欲の向上が増加することが重要である。また、保護者については子どもたちへスポーツの期待感も変化し、ハードルを下げるための意識面や環境面でのサポートが必要なこと、指導者については子どもたちにスモールステップでの指導を取り入れる重要性が確認された。

	スポーツ実施の阻害要因	効果スポーツ実施の促進要因（検証結果）
子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・ 苦手意識が先行してしまい、「できないからやらない」悪循環を招く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「からだの使い方教室」に参加することで、直接スポーツに入る時よりもスムーズに参加ができた。特に運動の苦手な子どもたちにとっていねいにゆっくりとしたスモールステップでの指導が必要である。 ・ 「できる」体験を多く積むことで、苦手意識を改善することができる。
保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもに対する期待感が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもに期待することが「礼儀・マナー」など周りを意識することから子ども自身の「得意な部分を生かす」「苦手意識をなくす」など子ども自身の変化に目を向けられるようになってきている。 ・ 子どもの「できた」が保護者にとっても喜びを与え、一緒に運動することが楽しくなっている。
指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一斉指導従来の指導法を実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人の様子に目を向け、小さな成長を楽しむスポーツ指導を身に付けていくことが必要となってくる。

本事業を通して得られた発達障がいの子どもたちのスポーツ意欲向上を促すポイントは以下のとおりである。

- ・発達障がいの特性である「こだわりの強さ」が影響し、やったことのないことにどうチャレンジしてもらうかがキーポイントになる。
- ・そのためにも指導者がスモールステップで指導するとともに、子どもたちの特性を理解して指導をしていくことが重要である。
- ・保護者も「みんなと一緒に」「きちんと行う」ということよりも「得意なことを生かす」ことを重要視できるように声かけをしていく。

7. 本事業から得られた波及効果

保護者からのアンケートからみられる波及効果は以下のようなものである。

- ・見通しが立っていたので、最初参加できなかったが継続したおかげでできた様子であった。自分はできるかもしれないと思ったようである。
- ・苦手な縄跳だが好きなリーダーがほめてくれるので一生懸命やっていた。苦手な縄跳びを頑張れることをほめたい。
- ・初めてバスケットをやった。ゴールに入れることがわかっていて低いゴールだったので楽しくできた。「できるかもしれない」という気持ちが育ってきたように思う。

上記記載などからわかるように、「できなかったこと・苦手だったこと」に対して「やってみた・できるようになった」という感想が聞かれた。スポーツだけでなく、生活上の「できるかもしれない」につながっていくことが望まれる。

8. 今後の事業展開予定

(1) 事業継続や横展開に向けたポイント、課題

- ・子どもたちのスムーズな参加のために「慣れた場所」「慣れた指導者」の設置が必要になる。身近で親しみのある場所での活動であり、指導者が知っている人というのが重要である。どんなに楽しい場所でも継続できなくては意味がなく、指導者がコロコロと変わるような状況でないことがポイントである。
そのためにも定期的なクラスの実施及び同じスタッフでの指導ができるかどうかは課題である。
- ・保護者が子どもたちに対してスポーツをどの程度までできるようになってほしいかの「期待度」を上げすぎないことが重要である。アンケートにもあったように「自分の得意なことを生かす」ことを考えられるよう、保護者への支援がポイントである。そのためにも保護者の意識改革をする必要がある。参加している保護者にお子さんの「得意な部分」を評価し、保護者の理解をいかに深めていくかが課題である。
- ・発達障がいのある子どもたちを対象とした場合、一般のクラスより個別の支援が必要であり、また一斉指導も難しいところから多くの参加者を少人数の指導者で回すことは難しい。そのため、人件費は一般クラスに比べて大きくなってしまふことが課題である。

(2) 次年度以降の事業継続、横展開の計画

- ・現在横浜YMCAでは発達障がいのある子どものための体育クラス「バランスアップ」を行っている。1クラス6名定員、指導者2～3名のクラスである。週1回、横浜YMCAのスタジオで行っている。このクラスを継続していく。
- ・今回の実験は被検者の人数が少なかったため、相対的結果となっていない。今回の実験で意欲の数値化を実施することができたので、今後同クラスで継続して実施していきたい。
- ・今回の実験は参加費無料で行えたが、今後有料化となると参加継続が難しい方も増えてくると考えられる。利用者負担額の軽減が必要である。

(3) 今後の事業展開に向けて期待される Sport in Life プロジェクトにおける取組

- ・実証期間が短いため、もう少し期間延長があるといい。
- ・同種プログラムの企画・実践している団体等と意見交換をする場がほしい。オンラインでの実施が可能な時代なので、ぜひ全国の自治体・地域・団体とのマッチングを希望する。

9. 終わりに

いままで経験則で「スモールステップでの指導が大切」とはわかっていたが、なかなかこの根拠を得ることができなかった。「上手になったね」「頑張れるね」など声掛けだけになりがちな部分であった。通常クラスとして発達支援クラスを実施する中で発達障がいのある子どもたちの運動・スポーツに対する意欲向上はスモールステップの上に成り立つことが立証できた。しかし、スモールステップでない指導、いわゆる「悪い指導」はできないので、「スモールステップをやらなかった場合」の立証をすることが難しい。この点をどのように立証していくかがこの実証実験の精査がに關係する部分であると考える。

また、保護者の子どもたちへの期待度が思った以上に高く、保護者の気持ちに寄り添い、どのように子どもたちの自己肯定感を高めていけるかを考えていく必要があると思う。今後も継続してクラスを行うと共に、障がいのある子どもたちと保護者を支え続けていきたい。

最後に、今回この実証実験にご協力いただきました神奈川県立福祉保健大学笹田哲先生、(株)横浜ビー・コルセアーズ様、学校法人横浜 YMCA 寺内章一郎先生、指導に橋梁して下さったリーダーの皆さん、協力して下さった子どもたち・保護者の皆様に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

Sport in Life 実証実験 「からだの使い方&スポーツ体育教室」

参加者アンケート(1回目)

■参加者情報

お子さまのお名前	
同伴者	<input type="checkbox"/> 父 <input type="checkbox"/> 母 <input type="checkbox"/> 兄弟 <input type="checkbox"/> その他 ()

■「からだの使い方教室」について

イベントのボリューム	<input type="checkbox"/> 多かった <input type="checkbox"/> やや多かった <input type="checkbox"/> 丁度 <input type="checkbox"/> やや少なかった <input type="checkbox"/> 少なかった						
スタッフの対応	<input type="checkbox"/> 大変良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 悪かった <input type="checkbox"/> 大変悪かった						
イベントの内容	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>普</td> <td>悪</td> </tr> </table>	-----	-----	-----	良	普	悪
-----	-----	-----					
良	普	悪					

■「スポーツ・体育教室」について

イベントのボリューム	<input type="checkbox"/> 多かった <input type="checkbox"/> やや多かった <input type="checkbox"/> 丁度 <input type="checkbox"/> やや少なかった <input type="checkbox"/> 少なかった						
スタッフの対応	<input type="checkbox"/> 大変良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 悪かった <input type="checkbox"/> 大変悪かった						
イベントの内容	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>普</td> <td>悪</td> </tr> </table>	-----	-----	-----	良	普	悪
-----	-----	-----					
良	普	悪					

■プログラムを始める前と後ではお子さんの様子に変化はありましたか？

■プログラム実施の時に重要なことは何ですか？（複数回答可）

<input type="checkbox"/> スポーツ指導のできる指導者	<input type="checkbox"/> 発達に理解のある指導者
<input type="checkbox"/> 運動できる環境	<input type="checkbox"/> 送迎バス
<input type="checkbox"/> 家族のサポート・理解	<input type="checkbox"/> ICTなどの機材
<input type="checkbox"/> その他	

子どものスポーツに対してどの部分に上達を求めますか？（複数回答可）

選手としての技術が向上する	
リーダーシップを身に着ける	
勝つ喜びや負けるくやしさを学ぶ	
ストレス解消や運動不足の解消	
よく考えて行動するようにする	
運動に対する苦手意識をなくす	
自分の事を自分でやる	
集中する力を身に着ける	
仲間と協力する姿勢・チームワークを学ぶ	
自分の得意なことを生かす	
礼儀やマナーを学ぶ	
丈夫で健康なからだになる	
からだを動かすことを楽しむ	

参加者アンケート(2回目)

この度はご来場いただき誠にありがとうございました。下記アンケートにご協力ください。

■参加者情報

お子さまのお名前	
同伴者	<input type="checkbox"/> 父 <input type="checkbox"/> 母 <input type="checkbox"/> 兄弟 <input type="checkbox"/> その他 ()

■「からだの使い方教室」について

イベントのボリューム	<input type="checkbox"/> 多かった <input type="checkbox"/> やや多かった <input type="checkbox"/> 丁度 <input type="checkbox"/> やや少なかった <input type="checkbox"/> 少なかった
スタッフの対応	<input type="checkbox"/> 大変良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 悪かった <input type="checkbox"/> 大変悪かった
イベントの内容	良 ----- 普 ----- 悪

■「スポーツ・体育教室」について

イベントのボリューム	<input type="checkbox"/> 多かった <input type="checkbox"/> やや多かった <input type="checkbox"/> 丁度 <input type="checkbox"/> やや少なかった <input type="checkbox"/> 少なかった
スタッフの対応	<input type="checkbox"/> 大変良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 悪かった <input type="checkbox"/> 大変悪かった
イベントの内容	良 ----- 普 ----- 悪

■プログラムを始める前と後ではお子さんの様子に変化はありましたか？

--

■1回目と比べて変化はありましたか？

--

子どものスポーツに対してどの部分に上達を求めますか？ (複数回答)

選手としての技術が向上する	
リーダーシップを身に着ける	
勝つ喜びや負けるくやしさを学ぶ	
ストレス解消や運動不足の解消	
よく考えて行動するようにする	
運動に対する苦手意識をなくす	
自分の事を自分でやる	
集中する力を身に着ける	
仲間と協力する姿勢・チームワークを学ぶ	
自分の得意なことを生かす	
礼儀やマナーを学ぶ	
丈夫で健康なからだになる	
からだを動かすことを楽しむ	

第2回	年齢	性別	からだ volume	スタツフ 内容	スポーツ volume	スタツフ 内容	変化	その他
Ki	年中	男子	やや多い	大変良い	やや多い	大変良い	普段から通っているYMCAのクラスや学校の体育などでこれまでの積み重ねが実り始めて、体を動かすことに前向きになってきていると感じた。2回目の参加でスモールスタツフの成功体験が効果的だと思います。	1回目と比べて 目的は同じでも少し同じで少し違う内容だっただけに目を輝かせながら参加できました。特にバスケは「シュートを決めたい」と自分で目標を決めてどのようにしたらよいかを試行錯誤し、最後に達成できた姿に成長を感じました。
Td	小2	男子	ちょうど	大変良い	ちょうど	大変良い	最初はやる気なかったが、やるに従った段々いきいきしてきました。	慣れるまでの時間が短くなりました。 色々な観点から楽しめるプログラムだと思う。
Yz	小2	男子	ちょうど	大変良い	ちょうど	大変良い	明るくなりました	1回目に比べ緊張がほぐれ明るく参加できたようです。 流れを理解できてきた。少し慣れが出てきたよう話を聞けなくなってきた。
Ss	小2	男子	ちょうど	大変良い	ちょうど	大変良い	子どもの興味を引くように仕向ける指導だった	最初は少し嫌がっていましたが入ったら楽しんで参加できました。少し動くのが楽しくなりました。
Rv	小2	男子	ちょうど	大変良い	ちょうど	大変良い	ボールが楽しいといっていました	最初は少し嫌がっていましたが入ったら楽しんで参加できました。少し動くのが楽しくなりました。
Yu	小2	男子	ちょうど	大変良い	ちょうど	大変良い	2回目の参加で流れがわかっていたので緊張せずに参加できました。	初めてバスケツトをやった。ゴールに入れることがわかって低いゴールだったので楽しく参加できました。
So	年長	男子	ちょうど	大変良い	やや多い	大変良い	からだをたくさん使って少しばてた	姿勢が変わりました。顔を上げる運動がたくさんあったので背中がピンとなっていました。あち運動に主体的になっていきます。楽しいからこそもっとやりたいとプログラムの働きが大きいようです。
N	年長	男子	ちょうど	大変良い	やや多い	大変良い	姿勢が変わりました。顔を上げる運動がたくさんあったので背中がピンとなっていました。あち運動に主体的になっていきます。楽しいからこそもっとやりたいとプログラムの働きが大きいようです。	やはり姿勢が違います。どの運動でもまっすぐ背中がなっています。体育座りもきれいになりました。運動により興味をもってやることも変化しました。
A	年長	男子	やや多い	大変良い	やや多い	大変良い	キャッチボールが上手になった。	じゃんけんが苦手じゃんけんのある練習で気持ち沈んだ様子です。 バスケはスモールスタツフで進めてもらえるようにしてもらいたい
Yt	小2	男子	ちょうど	大変良い	やや多い	大変良い	バスケが好きになったようよかった。	スクーターボードが楽しくなった
Re	小2	男子	ちょうど	大変良い	ちょうど	大変良い	からだの使い方は2回目だったのですんなり参加できました。バスケツトは新しいことで途中で参加できなくなってしまうました。	2回目だったので同じことはすんなりとできました。
SA	小1	男子	欠席					
Se	小2	女子	欠席					

参加者アンケート(3回目)

この度はご来場いただき誠にありがとうございました。下記アンケートにご協力ください。

■参加者情報

お子さまのお名前	
同伴者	<input type="checkbox"/> 父 <input type="checkbox"/> 母 <input type="checkbox"/> 兄弟 <input type="checkbox"/> その他 ()

■「からだの使い方教室」について

イベントのボリューム	<input type="checkbox"/> 多かった <input type="checkbox"/> やや多かった <input type="checkbox"/> 丁度 <input type="checkbox"/> やや少なかった <input type="checkbox"/> 少なかった						
スタッフの対応	<input type="checkbox"/> 大変良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 悪かった <input type="checkbox"/> 大変悪かった						
イベントの内容	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>普</td> <td>悪</td> </tr> </table>	-----	-----	-----	良	普	悪
-----	-----	-----					
良	普	悪					

■「スポーツ・体育教室」について

イベントのボリューム	<input type="checkbox"/> 多かった <input type="checkbox"/> やや多かった <input type="checkbox"/> 丁度 <input type="checkbox"/> やや少なかった <input type="checkbox"/> 少なかった						
スタッフの対応	<input type="checkbox"/> 大変良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 悪かった <input type="checkbox"/> 大変悪かった						
イベントの内容	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> <td style="width: 33%;"> ----- </td> </tr> <tr> <td>良</td> <td>普</td> <td>悪</td> </tr> </table>	-----	-----	-----	良	普	悪
-----	-----	-----					
良	普	悪					

■プログラムを始める前と後ではお子さんの様子に変化はありましたか？

--	--

■1、2回目と比べて変化はありましたか？

--	--

子どものスポーツに対してどの部分に上達を求めますか？（複数回答）

選手としての技術が向上する	
リーダーシップを身に着ける	
勝つ喜びや負けるくやしさを学ぶ	
ストレス解消や運動不足の解消	
よく考えて行動するようにする	
運動に対する苦手意識をなくす	
自分の事を自分でやる	
集中する力を身に着ける	
仲間と協力する姿勢・チームワークを学ぶ	
自分の得意なことを生かす	
礼儀やマナーを学ぶ	
丈夫で健康なからだになる	
からだを動かすことを楽しむ	

第3回

	からだ	スポーツ	変化						
	年齢	性別	volume	スタツフ	内容	volume	スタツフ	内容	変化
Ki	年中	男子	volume	スタツフ	内容	volume	スタツフ	内容	1回目と比べて
Td	小2	男子	やや多い	大変良い	良	やや多い	大変良い	良	やる前はあまり乗る気ではなかったがやってみると集中してできた。 遅れてきたので最初はやらなかったが、スケーターボードをみんなが楽しそうにやっているのを見て入ることができた。
Yz	小2	男子	やや多い	大変良い	良	やや多い	大変良い	良	回を重ねるたびに体を動かす力（イメージする力）が上達していると思う。 見通しが立っていたので、最初参加できなかったが継続したおかげでできた様子。
Ss	小2	男子	ちょうど	大変良い	良	ちょうど	大変良い	良	疲れていたが楽しんでいた
Ry	小2	男子	ちょうど	大変良い	良	ちょうど	大変良い	良	苦手な縄跳だが好きなライダーがほめてくれるので一生懸命やっていた。 最後までチャレンジできました 安心感が出てきた様子。
Yu	小2	男子	ちょうど	大変良い	良	ちょうど	大変良い	良	前回同様姿勢がよくなった。走る時も頭のとっぺんが天井に向かうようになっていました。顔を上げるといのが背中の筋肉にも良いというのを聞いて納得できました。 ドテドテ走っていたのが軽やかになりました。
So	年長	男子	やや多い	大変良い	良	やや多い	大変良い	良	短なわがとべるようになった 走り方が上手になって気がした
N	年長	男子	ちょうど	大変良い	良	ちょうど	大変良い	良	
A	年長	男子	ちょうど	大変良い	良	ちょうど	大変良い	良	
Yt	小2	男子							
Re	小2	男子	ちょうど	大変良い	良	ちょうど	大変良い	良	なわとび・かけっこなど好きな種目だった。最後は上手に参加できました。
SA	小1	男子	やや多い	大変良い	良	やや多い	大変良い	良	特になし 緊張していた
Se	小2	女子	ちょうど	大変良い	良	ちょうど	大変良い	良	からだの使い方がうまくなった。継続しないと忘れてしまうので家で練習させようと思う。 走り方が軽くなったと思う。

子どものスポーツに対するどの部分をもとめますか？（複数回答）

	3回目	2回目	1回目
選手としての技術が向上する	0	0	1
リーダーシップを身に着ける	1	0	1
勝つ喜びや負けるくやしさを学ぶ	0	0	1
ストレス解消や運動不足の解消	1	1	4
よく考えて行動するようにする	1	3	3
運動に対する苦手意識をなくす	10	8	4
自分の事を自分でやる	6	5	6
集中する力を身に着ける	10	9	8
仲間と協力する姿勢・チームワークを学ぶ	9	8	9
自分の得意なことを生かす	17	15	11
礼儀やマナーを学ぶ	4	6	8
丈夫で健康なからだになる	14	14	15
からだを動かすことを楽しむ	17	16	16

指導者アンケート

発達障がい児への運動指導経験	
経験あり（10回以上）	18%
経験あり（10回未満）	27%
経験なし	56%

一般児童への運動指導経験	
経験あり（10回以上）	96%
経験あり（10回未満）	2%
経験なし	0%

どのようなクラスで指導しました？	
一般クラスでの指導	70%
発達障がい児のみのクラスで指導	25%
その他	5%

講習会を聞いて考え方は変わりましたか？	
とても変わった	82%
変わった	18%
あまり変わらない	0%
全く変わらない	0%

表 1 本プログラム実施前後における走行タイムの比較

	実施前(11/28)	実施後(1/23)	平均	標準偏差
H	3.69	3.27	3.48	0.21
I	3.26	3.18	3.22	0.04
D	3.35	3.34	3.345	0.005
E	2.82	2.82	2.82	0
F	3.5	2.89	3.195	0.305
G	15.48	3.21	9.345	6.135

タイム 実施前後

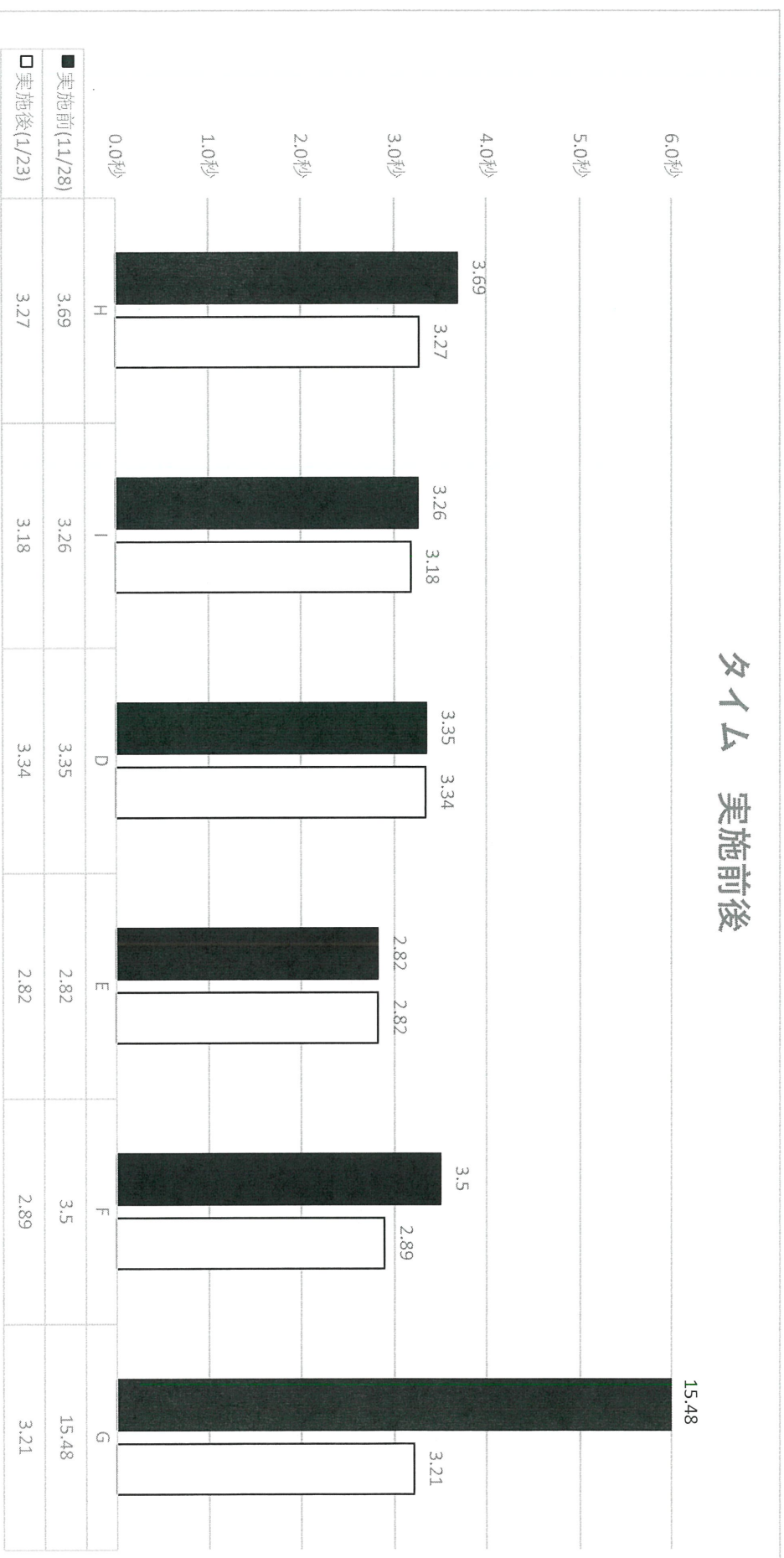


図1 本プログラム実施前後における走行タイムの比較

<走行タイムの前後比較について>

参加児童6名について、本プログラム実施前（21年11月時点）と本プログラム実施終了後（22年1月時点）において、タイムを計測した。5名は走行スピードタイムは向上した。1名（児童E）は変わらなかったが、この児童は、実施前から速いタイムであった。走っている様子が、初回時は、緊張し、不安な様子を示していた児童が多かったが、最終時では、走り終わった後、笑顔が見られ、またチャレンジしたいという発言する児童も見られ、和やかな雰囲気を観察された。

PVQ 前後比較

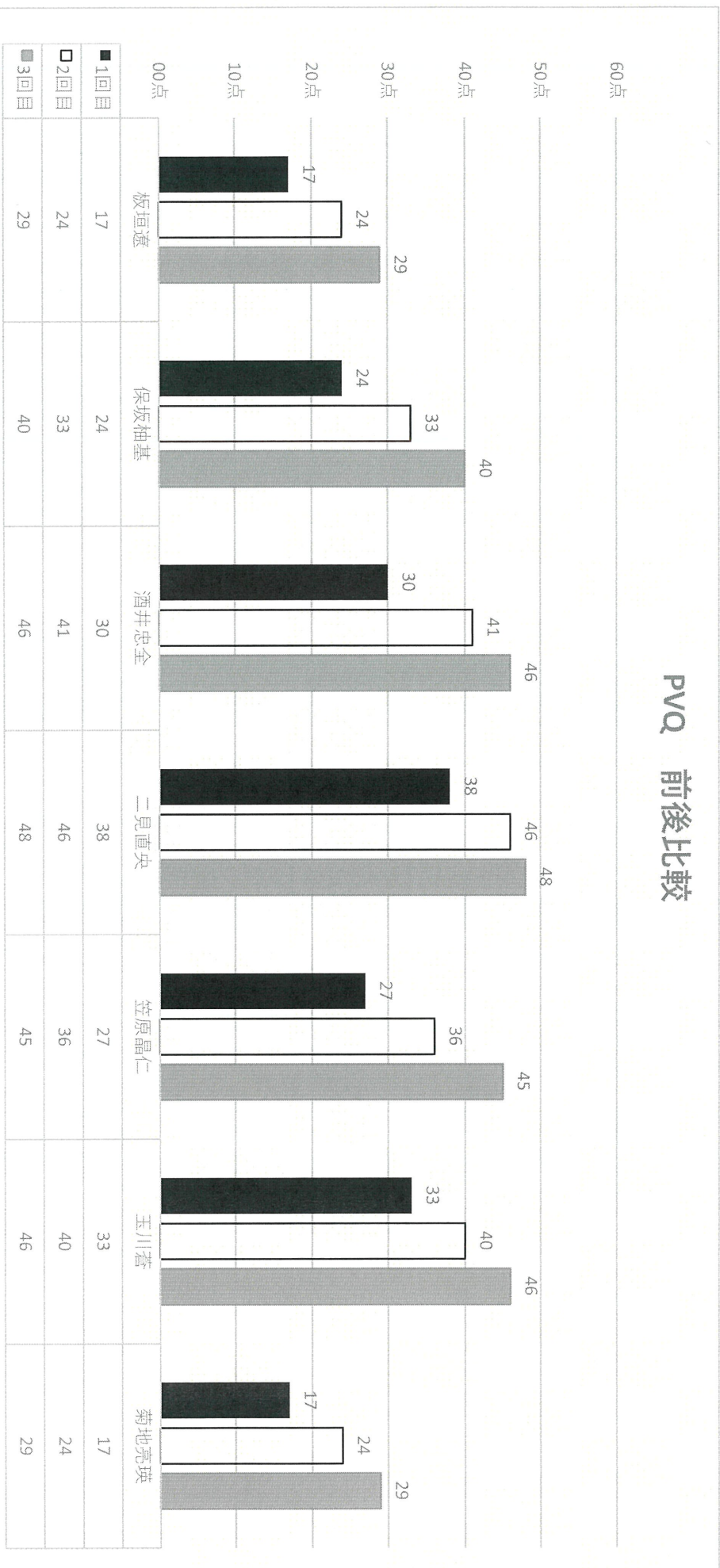


表2 意志質問紙 (PVQ) の得点の推移

	戸塚			菊名			
	A	B	C	D	E	F	G
1回目合計得点	17	24	30	38	27	33	17
2回目合計得点	24	33	41	46	36	40	24
3回目合計得点	29	40	46	48	45	46	29
平均値	23.33333	32.33333	39	44	36	39.66667	23.33333
標準偏差	4.921608	6.548961	6.683313	4.320494	7.348469	5.312459	4.921608

PVQ 前後比較

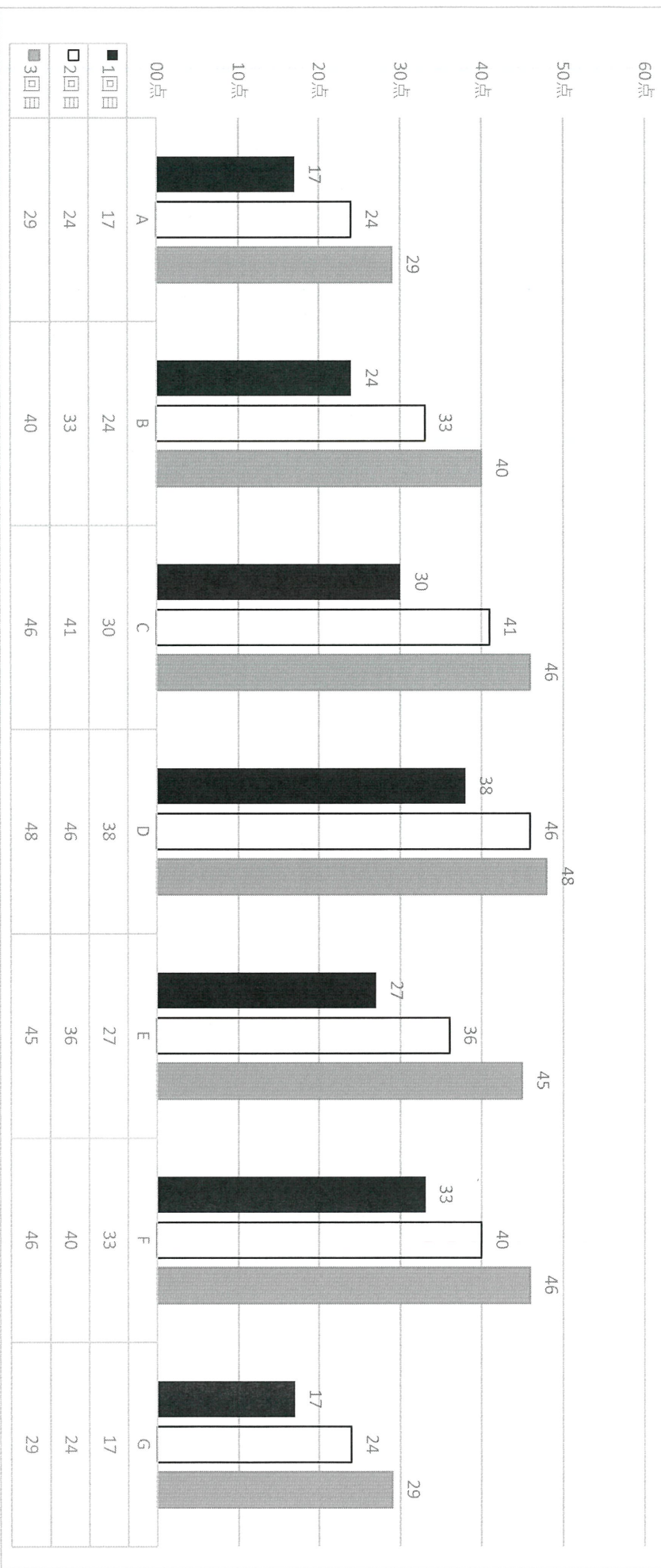


図2 意志質問紙 (PVQ) の得点の推移

<児童版・意志質問紙 (PVQ) の得点の変化について>

児童版・意志質問紙 (PVQ) は児童の運動活動における意欲、関心、興味などの程度を数量化した検査である。本プログラムは3回コースで企画したが、3回とも参加できた児童7名について、得点の変化を継続的に調べてみた。グラフに示したように、どの児童も、徐々に得点が増加し、上昇傾向を示していた。これは、参加回数を重ねるごとに、参加意欲、運動課題に対する参加意欲が向上していったと推察される。単に、運動技巧が向上しただけでなく、心理面、特に意欲、やってみたい、チャレンジしてみたいという自己効力感も向上していったと考えられる。

(※3回すべてに参加した児童7名<欠席しなかった児童>を対象に作成しています)

SCOPE 前後比較

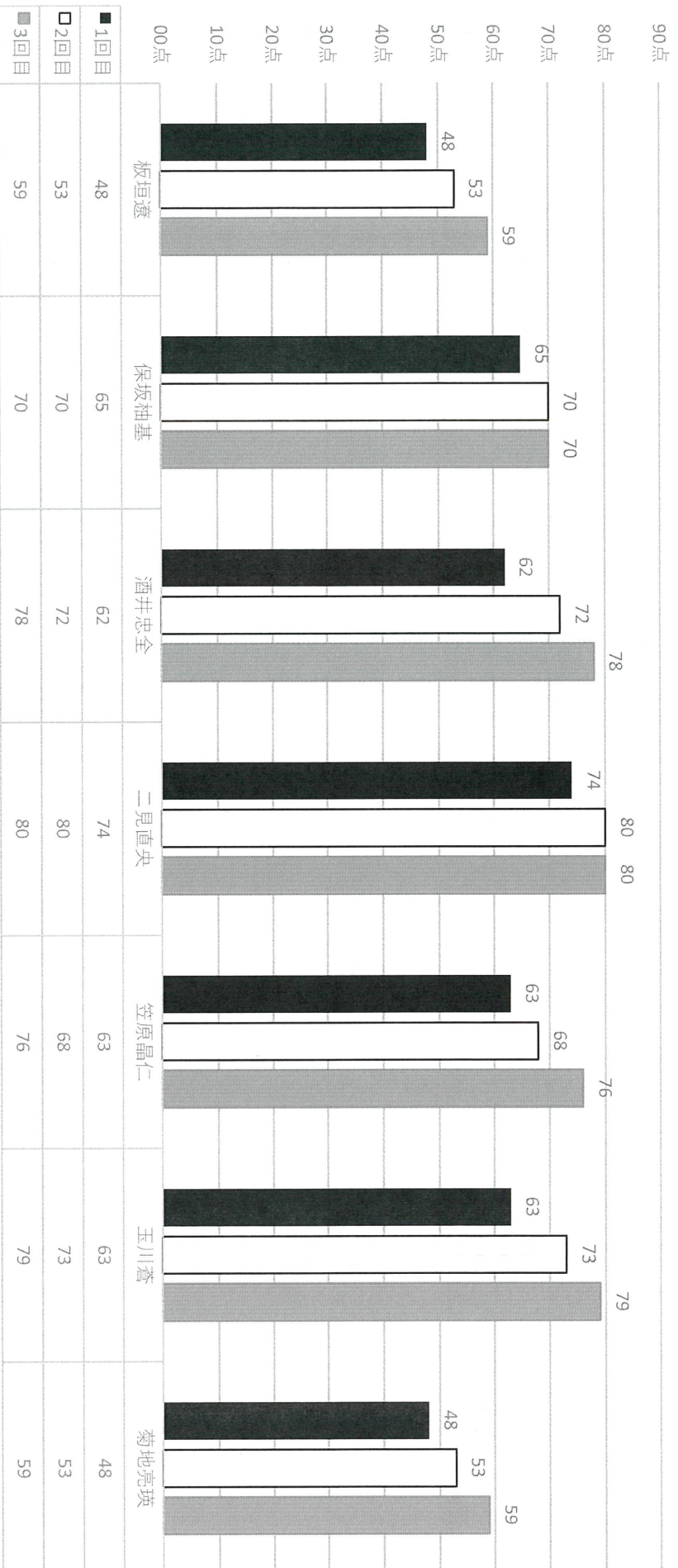


表3 短縮版・小児作業プロファイル (SCOPE) の得点の推移

	戸塚			菊名			
	A	B	C	D	E	F	G
1回目合計	48	65	62	74	63	63	48
2回目合計	53	70	72	80	68	73	53
3回目合計	59	70	78	80	76	79	59
平均値	53.33333	68.33333	70.66667	78	69	71.66667	53.33333
標準偏差	4.496913	2.357023	6.599663	2.828427	5.354126	6.599663	4.496913

SCOPE 前後比較

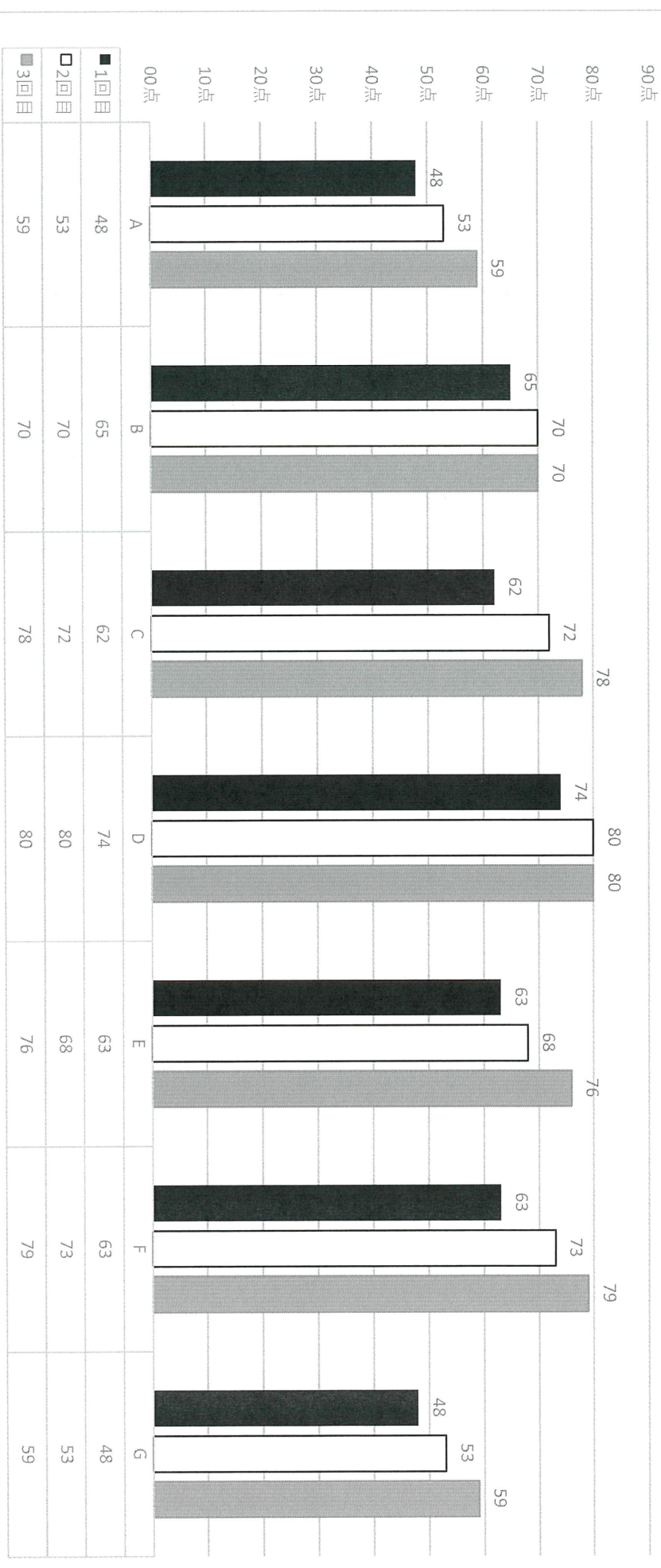


図3 短縮版・小児作業プログラム（SCOPE）の得点の推移

＜短縮版・小児作業プログラム（SCOPE）の得点の変化について＞

短縮版・小児作業プログラム（SCOPE）とは、児童の運動能力、生活習慣、役割、意欲などをトータルに評価する検査である。得点の伸びも、少しではなく、10点近く増えている児童が多く見られた。得点増加の要因としては、運動技能の向上のみならず、意欲の得点も向上していたので、それらが関連して、得点の大きな増加につながったものと考えられる。

（*3回すべてに参加した児童7名＜欠席しなかった児童＞を対象に作成しています）

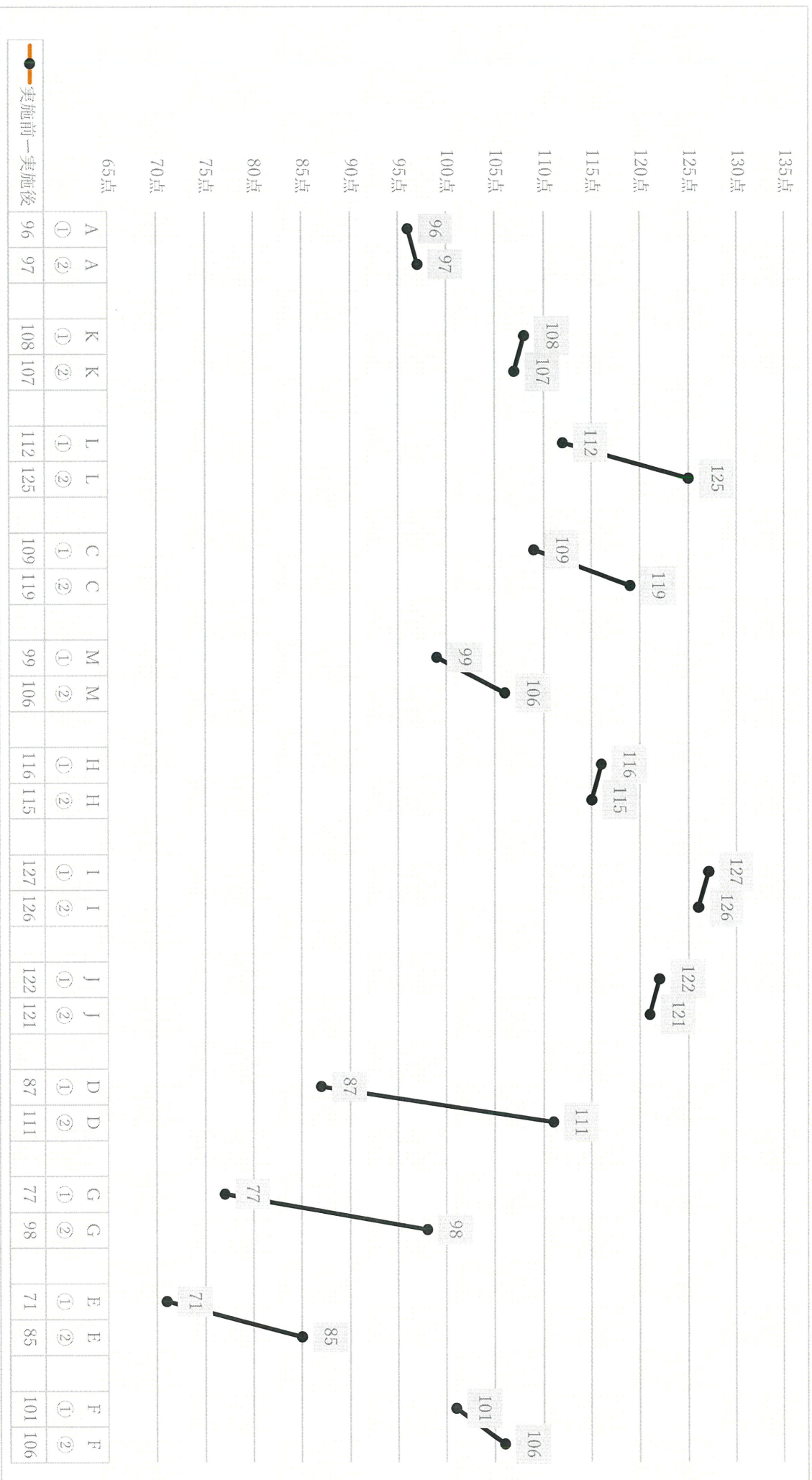


図 4 乳幼児発達スケール (KIDS) におけるプログラム実施前後の比較

＜乳幼児発達スケール (KIDS) におけるプログラム実施前後の比較について＞

乳幼児発達スケール (KIDS) を用いて、本プログラムの実施前後について、得点を比較してみたところ、得点が上昇していた児童は、12名中8名であった。4名は得点が下がっていたが、得点差が±1であり、下がったというよりは、ほぼ変わらないと捉えたほうが妥当であると考えられる。伸びた児童の得点の上昇傾向は、6名が大きな伸びを示していた。

(*実施前と実施後に回答してくれた人数、12名をもとに作成しています)